

カイロ三部作とは

舞台は世界遺産に登録されたカイロ旧市街。
中産階級の商人・アフマドの一家三代の大河小説。
個性的な人間群像と彼らの運命を生き生きと描く。
エジプトの歴史と文化の理解にもつながる名作。

第1部 『張り出し窓の街』

ISBN-978-4-336-05377-0

菊判 上製カバー装 544頁

本体5,000円＋税

第2部 『欲望の裏通り』

ISBN-978-4-336-05378-7

2012年2月刊行予定

菊判 上製カバー装 480頁

予価4,800円

第3部 『夜明け』

ISBN-978-4-336-05379-4

2012年4月刊行予定

菊判 上製カバー装 352頁

予価4,500円

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15

電話：03-5970-7421 ファックス：03-5970-7427

<http://www.kokusho.co.jp>

緻密かつ克明な筆致で書き綴られた作品。

カイロの情景をさまざまな歴史的瞬間とともに描き出し、
登場人物に息を吹き込んでいく。

『カイロ3部作』完訳版

ナギーブ・マフフーズ 著
埴治夫 訳

第1部 『張り出し窓の街』

第2部 『欲望の裏通り』

第3部 『夜明け』

国書刊行会

第1部 『張り出し窓の街』 あらすじ

カイロ旧市街に住む一家の長、アフマドの壮年期の物語。時代は第一次大戦中の1917年から1919年まで。この時期英国からの独立運動が活発となり、その指導者サアド・ザグルールがマルタに追放されると、エジプトはデモで騒然となる。19年革命として知られる事件で、本年1月から一部アラブ諸国で始まった民衆蜂起のいわば先駆けの様相。アフマドの次男で愛国青年のファフミーは、これに積極的に参加。やがてザグルールが釈放され、民衆が平和的デモを行って喜びを表現したが、突如英兵が発砲し、模範青年で一家の希望の星であったファフミーは、あたら19歳の若い命を落とす。

第2部 『欲望の裏通り』 あらすじ

時代は1924年から27年にかけてで、アフマドは初老となる。ヤーシーンはファフミーの恋人であったマルヤムと再婚したが、父の愛人となっていたザンヌーバとの浮気が原因で離婚し、後にザンヌーバを妻に迎える。カマールは理想を迫る青年として成長、親友の姉アイダにプラトニックな熱愛を捧げるが、彼女はカマールの友人で上流階級の若者と結婚。彼は絶望的な懷疑者となり、哲学的思索に耽るが、そのうち酒と女を知る。やがてザグルールの訃報が伝えられた夜、アイイシャの夫と息子二人がチフスで一度に死に、アイイシャはほとんど生きた屍と化す。

第3部 『夜明け』 あらすじ

時代は1935年から44年までで、その間に第二次大戦が勃発し、イタリヤがカイロを爆撃。その直後老衰したアフマド・アブドルガワードが世を去る。孫たちが成人し、ヤーシーンがザイナブに生まれ、セたりドワーンは栄達の道を歩み始めるが、政権交代で運命が狂う。ハディーガの長男アブドルムネイムはイスラム原理主義団体のムスリム同胞団に入り、次男のアフマドは左翼の活動家となる。

推薦の言葉 (第一部の小冊子より)

「三部作を含めてこれらの作品から受ける印象は、この作家の感性や見解は極めてエジプト的であり、格別にカイロの世界のものであるような印象を受けるが、その底流には、人が人としての尊厳が守られる政治や社会体制のもとで人生を送りたいという普遍的願望が読み取れる。」

大阪外国語大学名誉教授 池田 修

「三部作はアラブでも世界でも歓迎された大作で、多くの言語に翻訳された。三部作は過去現在を通じマフフーズが創造した文学的偉業となっており、1919年革命の以前、革命の当時、革命の以後の三代代を通じエジプトにおける社会的現実と人間的実験を描写したすばらしい作品である。」

在日エジプト・アラブ共和国大使館 文化参事官 ミセルヒイ・ラガブ

「マフフーズはエジプトをみごとに描いたといわれるが、彼にとつてエジプトを描くということは、カイロの町の日常を写し取るかのように描くことだ。そして、エジプト人を描くということは、一人の人間の人生を、その人の経験した悲しみや喜びの一つひとつまで描くことである。」

東京外国語大学大学院 総合国際学研究院教授 八木 久美子

ナギーブ・マフフーズ(1911年12月11日-2006年8月30日)
マフフーズはエジプトの文豪、1988年にアラブ人の作家として初めてノーベル文学賞の栄冠に輝く。カイロ旧市街に下級官吏の末子として生まれ、長じてカイロ大学哲学科に入学、卒業後官吏と作家の二足の草鞋を履いたが、定年後文学活動に専念し、94歳の高齢で世を去るまで、35冊の長編、19冊の短編集などを発表。その中で特に彼の文名を高めたのが、56、57年に発表された大河小説『カイロ三部作』で、一連の社会的リアリズム小説を完成させた大作。その後の時代では、人間と宗教の関係を上げた『わが町内の子供たち』(1959年に新聞連載)、宗教と悪徳の問題に焦点を置いた『選民の詩』(1977年刊)が力作で、ともに寓意的、象徴的筆致で書かれており、また『三部作』に次ぐ大河小説。これらに加え、マフフーズは多くの野心作を次々と発表し、多岐にわたる傾向、スタイル、更に技法を大胆に発展させた。晩年になってからも創造力は旺盛で、たとえばアラビアン・ナイトの後日談の形を取った『千夜の夜々(邦訳名シェヘラザードの憂愁)』が82年に刊行。短編の分野でも斬新な作品を多数創作し、最晩年になってからは夢想的な掌編を次々と発表。

紹介者 埴 治夫(はなわ はるお 1931年-)
1950年代外務省のアラビア語研修生としてカイロでアラビア語を学び、マフフーズ文学と出会う。70年代再びカイロに赴任し、マフフーズ作品の翻訳を開始。マフフーズ作品の主な訳本は、短編『狂気の独白』、長編『バイナル・カスライン』、短編『ナギーブ・マフフーズ短編集』、長編『シェヘラザードの憂愁』、長編『泥棒と犬』他に、『アブー・ヌワース飲酒詩選』。マフフーズとは1970年代に3回会った外、1989年にも会ってノーベル文学賞を授与されたことに祝意を述べた。